

# ONE LOVE 通信 58号

2016年9月18日発行

世の中、一体こつぱつこつぱつに!?母日のよつに起るアム、無差別殺人、憎しみ、罵りめつ言葉のオンパレード、ちょっと人と違うことをすると誹謗中傷。うーむ、その反面お涙頂戴のテレビ番組やらコラムが氾濫していたり、現実を無視してきれいごとだけを書き連ねたり…。世の中の人、怒りたいのか、泣きたいのか、それとも感動だけしたいのか? 本音を言うのは悪いとは思わない。でも言う相手とか、場所とか、あるでしょ?人を傷つけずに、自分を傷つけられずに一生を過ごすことはできないと思うけど、どうせだったら人を愛し、愛されたいぞ。そう思いませんか?



## 【ある巡回診療の一日、まだまだ続く…】

去年から今年にかけて、初めてクラウドファンディングと称する資金集めをやってみました。簡単に言えば、インターネットを使って、自分の支援したい内容にクレジットカードなどを使って寄付する仕組み。初めての挑戦でしたが、ありがたいことに予想を上回る寄付が集まりました。

現在その寄付を使って、巡回診療を通しての義足作りが進行中です。でも思った以上に手間隙がかり、焦ってやらずに、じっくり腰をすえてやるしかありません。

巡回診療は自分たちで勝手に進めるわけではありません。行政の力を借りながらやります。まず何ヶ所か訪ねるところをピックアップし、役場に連絡をします。そして詳しい日時・場所を決めます。これにとっても時間がかかる。役場の反応が遅いのです。返事をもらうまでに1ヶ月かかることはザラ。連絡を取るのは一ヶ所だけではないので、他の場所との調整もつけないといけません。

場所と時間が決まると、次は障害者への連絡。これは以

前より少し楽になりました。何度も訪れたことのある町だと、役場の人から自ら、その地区の障害者に連絡を取ってくれます。方法は役場の掲示板にお知らせを貼ることで、それを見た人が口伝えで連絡しあいます。

その間、私たちは準備です。材料を買い揃えたり、何人体制で行くか作戦を練ったり。遠方まで行くので車の整備も欠かせません。以前、キガリ市から3時間ほどのところで巡回診療を終え、家路についているときに車がエンスト。修理に数時間を要し、午前様になってしまったこともあり。夜中に移動するのは避けたいです。なぜならば故障した場合に対応できないこと、そして人気の少ない場所は危険も伴います。だからもうあんなのはこりこりです。

材料の調達もうまくいきません。ルワンダですぐに手に入らないものもたくさんあります。例えば足の切断部分の型をとるための石膏包帯。これすらもルワンダの市場から姿を消してしまうことがあります。あちこちの薬局を回り、場合によっては同業者から譲ってもらったりもします。

平行して杖作り。建築資材として使われる鉄パイプや鉄



板を杖の形に溶接して作ります。義足を配る相手に必ず1対渡すのと(義足を脱いだとき、杖がないと不便ですから)、それとは別に杖だけを配る人もいますので、大量の杖作りです。今回およそ1,000組の杖を作る予定です。電気溶接をするので、この期間は電気代がどーんと跳ね上がります。

前日のうちに車に道具や材料を積み込み、いざ出発です。役場につくと、既にたくさんの障害者が集まっています。今日は出発前のトラブルで、ちょっと遅刻をしてしまいました。でも遅刻が当たり前のようにになっているアフリカ、誰も文句を言いません。気長におしゃべりをしながら待っています。

本当はすぐに作業に取り掛かりたいのですが、形式にこだわるルワンダ人、大抵は最初に役場のお偉いさんの挨拶が始まります。そしてそれが結構長い。ここぞとばかり話し始めて、いや、実際その長さ、こちら側のテンションが下がってしまったりするのであります。

やっとその話も終わり、スタートです。まず集まった障害者のデータを取ります。

地方に住んでいる人は、十分な教育を受けられなかった人も少なくありません。特に年配の方、自分の名前を書けないこともあります。そういう人たちを目の当たりにすると、いかに日本が恵まれているかということに気づきます。当たり前のように学校に通い、勉強ができるということ。それに気づかず、学生時代を過ごしてしまいました。

集まってきた障害者たちは人数が多いので、データを一人ひとり聞き取るにも時間がかかります。本来はワソラブのソーシャルワーカーによってカルテに書き込むのですが、時間が足りません。そこで集まった人に「この中で字を書ける人はいますか?」と聞きます。おお、ちらほら手があがっています。その人たちに用紙を配って、記入を手伝ってもらいます。心なしか字を書ける人は「どうだっ」と威張っているような気がします。



右側のおじちゃんが字を書けるので、お手伝いをお願いしました。日本のみんなも、しっかり勉強しろよー。

さて義足ですが、集まったすべての人に配ることは残念ながらできません。数が多すぎて、予算でまかなうことができないからです。たくさんの障害者の中から、義足を渡して一番有効に使ってもらえるだろうという人を選びます。でも集まってきた人は、俺も私もと、義足がほしいから詰め寄ってきます。

私たちとしても手ぶらで返すのは忍びないので、あぶれた人の中から杖だけ渡す人を選びます。杖を渡すだけでもないよりはまし。しかし集まった障害者は、ここでもまたふるいにかけてられます。既に杖を持っている人は遠慮してもらいます。

そして今まで大して足を引きずらずに歩いてきた人が、突然ものすごい歩行困難な様子で目の前に現れます。つまり杖がほしいから、症状を重く見せて、杖をもらおうという魂胆ですね。これはですね、結構笑っちゃう。その豹変具合があからさま過ぎるのです。でも目ざとくそれを見つけると、「あなた、今、それほど困難なく歩いていましたよね?」と、杖をもっと症状の重い人に譲るよう諭します。

意地悪かなーと思いつつ、もっと必要としている人が目の前にいる状態では、どうしても誰にあげるか?という選択をしなくてははいけません。つらいところです。



杖の配布を待っている人たち。なぜか突然、ものすごい勢いで足を引きずり、悲壮な顔をしてやってくるが、その人はアウト!

義足を作ることが決まった人は、型取りをします。使わせてもらっている場所は、役場の一部なので、型取りをするための部屋があるわけではありません。男性の場合はそのままズボンを脱いでもらって、スムーズに型を採ることができるのですが、女性はやはり恥ずかしいです。人からは見られたくありません。だからカーテンを取り外し、それで急遽間仕切りを作ったりして、その場をしのぎます。以前もお伝えしましたが、困るのはノーパンで来る人。下着まで手が回らない人もいて、「はい、ズボンを脱いで」と言った時に、モジモジするのは大抵ノーパンの人です。そんなときはベルトとタオルで簡易ふんどしを作ってその場をしのぎます。

こんなふうに長い巡回診療の一日が終わり、義足の型を義肢製作所に持ち帰り、製作に取り掛かります。みんなで手分けして作ります。たくさんの人の義足を一度に作るので、カルテと型を間違えないようにしないとはいけません。右足切断だったはずなのに、左足の義足を作っちゃったなんてことになったら笑えません。

そんなこんなで一気に作り上げ、本来はまた訪ねていった場所まで出来上がった義足を持っていくのですが、今回はその計画通りに進めることが難しかった。なぜならばいつにない頻度であちこちを回っているの、私も含め、スタッフの疲労がかなりたまってしまったのです。だから役場の人に自分たちで交通手段を確保し(バスを借りるとか)ここまで来てくれるようお願いをしました。

そんな方法でやってきた皆さん。今日は新しい義足が手に入ることと、首都まで出てくることもあり、ちょっとお洒落をしています。今日はめちゃくちゃ忙しい一日になるはず。だって集まった10人の義足の仮合わせをし、そのまま仕上げなくちゃいけないのですから。朝から義肢装具士たち、殺気立っています。もっとも一番殺気立っているのは私かもしれません。義足を履いてもらって、歩く練習をしてもらって、具合の悪いところがないか聞きます。問題なく一度でOKとなれば良いのですが、これがなかなか



…。今日はお昼を食べる時間ありません。みんなは私が「お昼にしよう〜」と言い出すのを待っているようですが、甘い！一食くらい食べなくても死にゃあしないのだ。そのままぶっ通しでやらせる私は鬼かもしれません。

でもそんな甲斐あって、とにかく10人分を仕上げ、皆さんに渡すことができました。受け取った人は、そのまま履いて帰る人、丁寧に風呂敷に包んで担いで帰る人などさまざまです。

そんな感じで今は通常の義足製作と、巡回診療による義足製作を平行して進めています。もう少し早いペースで巡回診療を進められると思っておりましたが、なかなか思ったようにはいきません。でもこれからも少しずつ進めていきたいと思います。

クラウドファンディングでご協力を下さった皆さま、そしていつもワンラブを見守ってくださる皆さま、これからもがんばりますので応援してください。よろしくっ！



## 紹介します！ワンラブのスタッフ

今日は新しいスタッフの紹介ではありません。おめでたいお知らせです。

ワンラブの義肢装具士で、日本にも義肢製作の研修を受けに行ったアシエールとフォンダシオン、二人とも所帯を持ちました。

最初に結婚したのはフォンダシオン。奥さんとの間には、既に子供も生まれ、一緒に生活をしているのですが、けじ

めをつけたいということで、正式に役場にも届け、ワンラブのレストランを使って小さな披露宴を開きました。

ルワンダの結婚式と聞くと、どんな感じ？と思う人も多いかと思いますが、結構退屈です。一般的な流れは、まず前もって役場に届け出ます。みんなの前で宣誓し、いわゆる婚姻届にサインをし提出。その後内輪の小さなパーティをします。そして別の日、身支度を整えた新郎新婦は教会で結婚式を挙げます。親戚や友だち、たくさんの人が集まります。一組だけのときもあるし、その日に結婚する人が多ければ、何組かをまとめてミサを行い、指輪の交換をします。



できちゃった婚のフォンダシオン。  
小柄な彼は、奥さんのほうが背が高いです。

その後は町の洒落たスポットで記念撮影。見ている方が恥ずかしくなるようなポーズを取ったり、親戚みんなそろって何枚も何枚も写真を撮ります。

そして披露宴。何が退屈かということ、この披露宴が退屈なのです。まずルワンダ語で進むので、何を言っているのか理解が難しい。極めつけはメリハリがない。いつスタートしたのかわからない、次に何をやるのか良くわからない。つまり全体的にゆる〜く進行していくのです。

フォンダシオンの披露宴もそんな感じ。今しゃべってい



## ルワンダ事務所代表ガテラより

### 【憎しみを消すために】

日本で大変な事件が起きたと聞いた。障害者の施設にいる人たち19人の命が、一瞬にして失われてしまった事件だ。

やったのはまだ若い青年と聞く。彼は障害者がこの世から消えれば良いと思っていたらしい。

なんということだ。人として、一番卑しい行為は「差別」だ。それをこの青年はやってしまったのである。

嫌いな人がいるのは当たり前。世の中すべての人間を好きになることなんて、できっこない。でもだからと言って、相手を殺すのか？しかもこの場合の相手は社会的弱者だ。抵抗もできない人を、しかも眠っているときに襲うなんて、許せる行為ではない。お前はそれでも男か？男なら自分と互角に戦える相手と正面からぶつかれ。

この青年は、いつ自分がその立場になるかもしれないということに気づいていない。

障害者になるという可能性は、誰でも持っている。突然屋根が落ちてきて、障害を負ってしまうかもしれない。あるいは生まれながらに障害を負っていることだってあるのだ。

もしかしたら障害者は、この青年が思っているように生産

性が低いのかもしれない。でも少なくともお前よりはまともな考えを持っているやつらがいっぱいいるぞ。

その施設に残った人たち、その現場にいた人たちのトラウマは理解するに余りある。目の前で殺戮が行われている様子を見て、どれだけの恐怖を味わったか…。

俺はなるべく人を憎みたくない。そして羨みたくない。その感情が、良い方向に向かうことが少ないからだ。その感情に現を抜かすより、もっと前向きなことを考えたい。

でも残念ながら今の世界は、この二つの感情が優先されているように感じる。

これを考えると、日本が敗戦を認め、戦争を放棄したということは、ものすごく勇気のいったことだと思う。相手を憎むという感情を、そこで封印したのだ。そして戦いは終わった。だから今の日本があるのだ。

今、日本では戦争放棄という、世の中の手本となる憲法を変える話が上がっているらしいが、日本人はその憲法に自信を持つべきだ。これ以上世界に誇れる強い思いはないのだから。憎んで戦争を起し、得をする人はほんのわずか。多分一般の人たちは、その得をする側には含まれないはずだ。それがわかれば、そう簡単にこの憲法は変えられないはずだ。

るのが一体誰かのか？ということも説明ない。それから大抵の披露宴は食事がなくて、ソフトドリンク（場合によってはビールも）のみで3時間以上を過ごすので、お腹がすくのですねえ。途中、ケーキカットがあり、そのケーキを振る舞いはするが、一人に配られるケーキなど高が知れているのだ。（フォンドーションの披露宴は珍しく食事が振舞われましたが…）

そしてプレゼント贈呈。バンドも入り、これから盛り上がるか？と思ったころ、ああ、しかし残念。雨が降り始めてしまったのです。しかもかなり大量の。披露宴をオープンスペース、つまり庭を使うことも多く、彼の披露宴もレストランの庭でやっていたので、みんな濡れないようにとその場を去って行き、なんとなくそのままお開きになってしまったのであります。

アシエールの結婚式も通常のルワンダの結婚式の様式にのっとり行われ、最後の披露宴はやはりワンラブランド内にあるホールを使って行われました。アシエールは2メートル弱の身長があるけれど、奥さんは小柄。二人が並んで立つと凸凹です。

フォンドーションの披露宴は小ぢんまりとしていましたが、アシエールは少し奮発したのかもしれない。招待したお客さんの数も多いです。その中にはワンラブで義肢装具士として働いていた人たちの姿も見かけられます。しかしそのうちの一人は、どこで飲んできたのか、したたかに酔っ払ってやってきてひんしゅくを買っていました。



「ボクのお嫁さんはちっちゃいです。」と紹介してくれたアシエール。そりゃ、あなたに比べれば小さいけどね。

ワンラブが始まってもうすぐ20年経ちますけれど、こんなふうにスタッフが所帯を持つ様子を見ていると、時の流れをしみじみと感じます。所帯を持つことによって生じる責任、それを彼らが受け止めながらこれからも一緒に働いてくれればいいなとつくづく思います。

ちなみに今回結婚した二組の招待状は、去年からスタートしたパソコン教室の生徒たちが作りました。パソコンを学んだ生徒たちが、こうして一つの作品を作り上げられるようになったことを、とても嬉しく思います。

### 【そして今年、日本へ研修員が一人行きます。】

ワンラブでは過去8人のルワンダ人義肢装具士を日本へ送り、技術研修を受けさせてきました。

今年では9人目の、ブルンジの義肢装具士見習いを日本へ送ります。この通信が届くころには既に日本で、日本語の研修をしている時期だと思えます。

先の通信でもお伝えしたように、ブルンジの状況は未だ改善されていません。去年のクーデター未遂から泥沼状態となり、あちこちで殺戮・略奪・拉致などが起こっていま

す。目を覆うばかりの残酷な方法で殺し合い、その殺された遺体の写真が、SNSを使って飛び交っています。この先ブルンジの状況が良くなるか？目処は立っていません。

今回研修員として日本へ行くのは、フィルバート・ブスグル（通称フィニ）という36歳の男性。ちょっと年齢は上ですが、ブルンジからルワンダに引越して、義肢製作の勉強をしています。本人は足に装具を履いています。

もともとはブルンジの義肢製作所で受付けをしていました。来る患者さんたちのカルテを作ったり、義足の受け渡し方法などを説明したりするのが仕事でした。でも代わり映えのあまりしない事務仕事。いつしか彼は事務仕事が少ないときは、義足を作っているほかの義肢装具士に混じり、作り方の勉強を始めました。そしてそんなときにブルンジの情勢が悪化し始めます。あちらで3人、こちらで5人と、少しずつ人が殺される状況が増えてきました。自分の身の安全を確保しようと思うのは当然のことです。このままブルンジに続けると、いつ自分も殺されてしまうかわかりません。そしてルワンダに生活の場を移し、正式にルワンダの義肢製作所で技術を学び始めたのです。



アシエールの指導の下、ボク、がんばっています。フィニです（写真左）。日本の皆さん、7ヶ月間よろしく！

ルワンダとブルンジは言語がとても似通っています。生活や文化も似ています。だから違う国から来たと言っても、みんなとの交流や生活様式は全く問題ありません。すぐにルワンダに馴染みました。

今回研修に行くフィニは初めての飛行機、初めての海外。この原稿を書いている今日、彼は日本へ旅立ちました。無事に飛行機、乗り換えられるかな？日本の生活に馴染めるかな？またいろいろ勝手に心配してしまう私です。

先の研修員と同じように、日本に到着したら1ヶ月の日本語研修を受け、その後技術研修が始まります。今回は神奈川県のリハビリテーションセンターが研修先です。神奈川県の中では義足を作る数が多い場所で、技術も新しいものをどんどん取り上げているところです。今まで私たちはどちらかという現地色が強い義足を作り続けてきましたが（材料が手に入らないということも理由の一つ）、この研修を機会にステップアップした技術も取り入れたいと思っています。そのためには彼にしっかり勉強してもらわなくてははいけません。皆さま、一緒に応援してくださいね。

それからこの場を借りてお礼を申し上げたいと思います。今まで何人も研修員を受け入れてくださった平井義肢、健康上の理由から、研修員を受け入れることが難しく、今回は神奈川県リハビリテーションセンターに研修をお願いすることとなりました。私に義足作りの大切さを教えてくれたのは他ならぬ平井義肢の親方です。親方、どうもありがとうございました。

## 【このごろの世の中】

ルワンダで海外の情報を得る手段はインターネット。朝、メールのチェックを終えると、仕事に取り掛かる前に、ニュースに目を通す。

そうすると出てくるわ、出てくるわ、いやなニュースが。毎日のように世界のどこかでテロ。日本人が被害に遭うことも多くなってきた。

自分がちょっとでもかかわった国や場所がテロの標的になると、自分もその事件に巻き込まれた可能性があったと、ぞっとすることも。

例えばトルコのテロ。アピリンピック参加のときに、トルコを経由した。航空券を買ったとき、イスタンブールのトランジットで時間があるから、トルコ航空の人はどこか近場で観光できるところはないか？と聞いた。いくつかの場所をあげてもらい、そこに行くつもりでいた。そしたらそこでテロが起こった。だからおとなしくホテルに留まっていたように思った。そしてイスタンブール到着。本当ならいったん空港を出て、ホテルに通される予定だったが、私たちの手違いで、トルコのビザを発給してもらえず、空港で往復とも丸一日を過ごした。

アピリンピックは無事に終わり、フランスからルワンダへ戻った。しばらくしたら、今度はトルコ国際空港でテロ。自分たちが座っていた長い、3食お世話になったフードコート、それらの場所にもテロの被害があったようだ。

アピリンピック開催中にはベルギーでテロ。戻ってきてからフランスでもテロ…。インドネシアでも、ドイツでも…。テロがない日がなくなっているくらいだ。

そして日本でも勝手に憎むべきターゲットを作って無差別殺人が起きている。

自分と違う人間を淘汰されるべき人間と都合の良いように解釈して、罵ったり、殺したり。

もうこういう世界はいやだ。第一、人が人を罵っている言葉は品がない。聞いていて恥ずかしくなる。

私はルワンダに来る前は、人間は平等だと言っていたけど、そんなに甘いものじゃないということを目の当たりにしてきた。同じ場所に行くにもかかわらず、私はすんなり通れて、ガテラはズボンを脱がされるまでチェックをされたりする状況を体験してきた。そして世界は平等ではないということを知った。

ではその世界の中で自分がこれからどう生きていくのが良いか？と考えたとき、行き着いたのは、みんな違うのは当たり前。その違いをそのまま受け止めようということだ。肌の色、宗教、肉体的な違い、考え方の違い。人は人、私は私という、もしかしたら投げやりな考え方なのかもしれないけど、そう思うことによって自分の中で、憎む、嫌うという感情が少し減ったような気がする。もちろん性格的に嫌いな人と言うのはいるけれど。

こんなふうにテロや憎しみばかりの世の中だと、そのうち地球は一度滅びた方がよいなどと思ってしまう。いやなニュースばかりのこの世の中、真剣にそれもありだなあと考えてしまうのだ。

## 【まだ足りないものいっぱいあるぞ、ルワンダ】

うちには猫がたくさんいるが、どうしても他の猫と仲良くなれないのが一匹いて、その子は家猫として飼っている。日ごろ愚痴がつもり積もっている私の心を癒してくれる猫である。その猫が尿道結石になった。

おしっこが出なくなると毒素が体に回り、死に至ることもある。慌ててルワンダの獣医を探す。ルワンダは牛・ヤギなどの家畜を扱う獣医は多い。しかしペットを扱う獣医は限られている。

やっと見つけた獣医さん。症状を話し、治療をしてもらうのだが、どうにも手つきが怪しいし、知識も十分でないような気配がある。結石が尿道に詰まってしまった場合は、カテーテルを挿入しなくてははいけないという知識を、インターネットで調べてしまった私は、そのことを伝えてみる。しかし小動物用のカテーテルはルワンダで手に入らないのだ。そうこうしているうちに数日が過ぎ、猫の具合はどんどん悪くなっていく。こうなったら日本から取り寄せようと、FBで呼びかけたら、カテーテルを送ってくれる人が見つかった。しかし国際宅急便を使ったとしても数日かかる。しかもその獣医はカテーテルが届くということがわかったら、急に及び腰になった。つまり今までカテーテルを挿入したことがないから、治療する自信がないのだ。電話をしても出なくなった。焦って、別の獣医を探す。その間私は猫を飼っている友だちや日本人の獣医さんにどう対処すべきか相談をする。調べれば調べるほど、手遅れになると「死」という言葉がチラついてくる。やっとカテーテルが届き、新たなルワンダ人の獣医が見つかり、新獣医にカテーテルの挿入をお願いしたのだが、本来は数日間カテーテルを入れっぱなしにしておくてはいけなくて、皮膚に縫い付けなくてははいけないところ、それをしない。私がやってくれ！とお願いしているにもかかわらず。結局、新獣医も技術が足りなくて、カテーテルを皮膚に縫い付ける自信がないのである。

その後いろいろ問題はあったものの、何とか愛しの猫は容態を取り戻し、現在に至っているが、キガリにはこういった事態にすぐに対応してくれる動物病院がないということがわかった。今回も猫の尿検査をしてもらったのは、人間用の病院。結石の有無を調べるためのレントゲンも、夜中、病院が閉まった後、こっそりと人間の病院にもぐりこみ、その施設を使わせてもらう始末である。ルワンダの獣医曰く、ペットを飼っている人が少ないため、ペット用の動物病院を作っても需要がない、つまり儲からない、だから誰もやりたがらないということだ。

愛する猫が瀕死の状態をさ迷うという状況を目の当たりにして、ルワンダはまだ足りないことがたくさんあると痛感した。日本では当たり前のように手に入るものも、ルワンダではわざわざ外から取り寄せなくてははいけない。94年の大虐殺が終わり、ルワンダは確実に発展に向かって進んでいるが、どこかその向かっている方向は偏っていて、まだ目を向けられていない部分がたくさんあると思った猫騒動でした。



# 雑文もろもろ

2016年に入ってから、気になる著名人がたくさん亡くなっている。私の場合、プリンスというミュージシャン、ボクシングのモハメド・アリ、相撲の千代の富士（九重親方）である。

それぞれ一世を風靡し、その世界を極め、社会にも影響を残した人たちである。

しかし最近思うのは、それら偉大な人が亡くなっても、ニュースになっている期間が短いということだ。亡くなった当日、そして数日間は騒がれるものの、あっという間にニュースに彼らの名前があがらなくなる。

なんだかね、あれだけ偉業を成し遂げた人がすぐに忘れ去られちゃうようで、寂しい気がします。

この「あっという間」と言うのはいろんなことに当てはまっているように思います。ものすごく大きな事故や事件が起きて、すぐ次の出来事が追いかけてやってくるから、世間を騒がせているのはほんの数日。どんな悲惨な出来事も、どんどん慣れっこになっちゃう。

確かにルワンダのレストランに行って注文をすると、食べ物が出てくるまで1時間かかることはザラなので、何かにつけてスピードが早いということは非常にありがたいことなのだが、ただ早いというのは不安も感じる。どんどんいろいろなことに慣れてしまって、当たり前になり、それを自分の中で消化する時間が減ってしまい、知識としては持っているけど、それ以上何も考えない。

それにしてもモハメド・アリはすごかったなあ。ボクシングだけでなく、権利や差別にも正面から立ち向かったし、ザイルのキンシャサでフォアマンと戦った試合は、今でもアフリカの人たちの話題に上るし。千代の富士だって、相撲取りらしくない筋肉で女性を魅了したではないか。

ルワンダの発展も、94年の大虐殺後ものすごい勢いで進んでいっているが、私には少々スピードが早すぎる。そしてそのスピードから取り残された人たちもいるのだ。

私も根っからの日本人で、時間にはうるさいけれど、今の世の中のスピードがもう少し遅くなってくれればいいのになあって思う今日この頃。

## 【ご寄付ありがとうございました】

ワンラブ通信57号をお送りしてから今までのご寄付は以下のとおりでした（4月～7月）

4月	円
5月	円
6月	円
7月	円

このおかげで、ルワンダとブルンジ合わせて、次の製品を配布することができました。今回はクラウドファンディングの資金もあったので、たくさん作れました。

義足	103本
装具	21本
杖	215本
車いす	4人

皆さまの温かいご支援に、改めて感謝申し上げます。

## 【書き損じはがき・テレカありませんか？】

書き損じはがき、テレホンカード、商品券などありませんか？ 暑中お見舞いを書こうとたくさん買ってしまっただがきや書き損じはがきなど、ワンラブ通信を発送する際の切手などに換えて利用したいと思いますので、ぜひお譲りください。

## 【来年のカレンダーはぜひこちらを！】

ワンラブが東北福祉大学のカウンターパートとなって障害者のためのパソコン教室を開いていることはお伝えしましたが、現在パソコン教室に通っている生徒たちと一緒に、来年のカレンダーを製作中です。まだパソコンを使い始めて間もない生徒たちですが、彼らが写真を撮りに行ったり、カレンダーのデザインを考えたりして、一生懸命取り組んでいます。

11月くらいには出来上がる予定ですが、ぜひ皆さま、そのカレンダーをお求めください。ルワンダの生活風景がたくさん写っているカレンダーです。

このカレンダーの売り上げは、パソコン教室運営またはその後の生徒たちが組合を作るときのための資金として蓄えられます。一応パソコン教室のプロジェクトは来年3月で終了しますが、できれば学んだ生徒たちを集めて組合を作りたいと考えています。そのための資金となります。

定価は1,000円。他の誰も持っていないカレンダーです。だから「いいでしょ？」って自慢もできますよ。

販売がスタートしたらFBなどからお知らせします。パソコンを使っていなくてFBを見られない、でも関心があるという人は下記の住所・電話にご連絡ください。入手方法をお伝えします。

だから他のカレンダーは、買ったがダメですよー！

## 【お願い】

ワンラブ日本事務所は、皆様のご意見を積極的に取り入れていきたいと思っています。ルワンダ・ブルンジについて知りたいこと、ワンラブに対するご意見等、どしどしお寄せ下さい。

通信発行のお手伝い、イベントのお手伝いなど、相変わらずボランティアも募集しております。またルワンダ・ブルンジで中長期のお手伝いをお願いできる方、ぜひご連絡ください。

## 【おことわり】

- \* 発送作業の都合上、振込用紙を同封させて頂いておりますが、すべての方に寄付金・会費を催促するものではありません。
- \* 当団体はご提供いただいた個人情報について、皆さまからご同意を頂いた場合や、正当な理由がある場合を除き、第三者に公開、提供することはございません。

書き損じはがき、テレホンカードは下記、茅ヶ崎事務所までお送りください。ご寄付は下記の口座まで、みなさまのご支援お待ちしております。

※事務の簡素化と経費節約のため、領収書は省略させて頂いています。

必要な場合は、振込用紙の通信欄に「要領収書」とご記入ください。

〒253-0051 茅ヶ崎市若松町12-28-304 Tel: 0467-86-2072/080-6564-4448

e-mail: info@onelove-project.info (日本事務所) onelove@rwanda1.com (ルワンダ事務所)

郵便振替口座：00210-5-66497

ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

ワンラブ通信58号 2016年9月

発行：ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

<http://www.onelove-project.info/>

<http://oneloverwanda.blog105.fc2.com/>

<http://www.onelove-project.org/>

